

前史（～1908年）

1節 米国「神の教会運動」の始まりと「神の教会」の主な教理

1800年代、特に、南北戦争(1861年～1865年)後の米国の教会には合理主義と、靈的に冷たい教理主義の風が吹き荒れていた。多くの教会は分裂し、傷つき倒れ、力を失って、初代教会頃の、あの燃えるような激しい生命力は枯渇してしまっただけに見えた。神の教会運動は、このような歴史的状況の中で米国の中西部地域で始まった。最初の出現は、インディアナ州、ミシガン州、オハイオ州、そして、イリノイ州であった。

運動が始まったのは、1880年のことと一般に伝えられているが、実際には、1877年か1878年に最初の指導者たちは、この運動を始めようという見通しを持っていたと言われている。

1881年10月始め、インディアナ州北部にあるピーパーダムという小さな村の教会に、種々の教派から人々が集まった。それはインディアナ州北部長老派の集会に出席するためであった。この時、ダニエル・S・ワーナー師と協同者たちは、教派主義を「キリストの体を分割してしまった」と痛烈に攻撃し、あらゆる教会団体から身を引いた。

ワーナー師は、1842年1月25日に、オハイオ州東部の小さな町で居酒屋の息子として生まれた。父親は短気で怒りっぽく、いつも母親をいじめていた。しかし母親はクリスチャンではなかったが優しい人で、病身のワーナー師の面倒をよくみてくれた。ワーナー師は、20代になって宗教に関心を持ち始めたが、かなり反発した。ある夜、伝道集会に出席して救われてから、完全な「聖化」、第2の恵みを経験し、教派主義に対しては熱心に反対した。彼はペンを持って立ち上がり、1881年1月、インディアナ州のローマシティで、ゴスペル・トランペットと題する雑誌を発行した。こうしてこの運動は、全米に広まっていったのである。

彼らの主張は「人はキリストによって贖われて正しい生活に入るだけでなく、他のキリスト者との交わりと調和を持たねばならない」ということであつた。初期の指導者たちは、歴史的キリスト教が持っていたものを否定したのではなく、むしろ彼等はファンダメンタリストと呼ばれることを恥としなかった。彼等は、神学的には正統派信仰にとどまった。個人的敬虔と聖霊による「聖め」を強調したが、決して個人主義的分裂を認めた訳ではない。彼等は、聖書の中の幾つかの真理を取り出して、それを強調して満足しているのではなく、常に聖書全体の真理に関心を向けた。イエスは神の聖なる御子であり、世の救い主、すべての病の癒し主であられた。彼等は、洗礼式、聖餐式、洗足式の必要を唱えた。また、彼等は、聖霊の導き以上のものを決して求めなかった。

神の教会運動の教えは、非正統的で異端的なものは、何一つなかった。神の教会運動は、基本的キリスト教教理に関する限り、完全に歴史的キリスト教の主張の中に属している。この運動を分析した最近の学者たちが、一つとして「新しい」教理を導入していなかったことに注目している。初期の指導者たちが強調し、宣教した全ての神学的教えは正統的キリスト教の枠内で、既に明言されているものであつた。この運動の初期の指導者たちは、改革者ではあつたが、キリスト教信仰の基本的教義を曲げたり、改ざんしたりはしなかったのである。

16世紀におけるプロテスタントの改革は、ローマ教会に対して、下記の4つの点にかかっていたが、神の教会運動は、プロテスタントが強調している共通の信仰を共有しているのである。

(1) 信仰義認 (Justification)

「イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それは、すべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」(ローマ人への手紙3章22節)あるいは、「ですから、信仰によって、義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています」(ローマ人への手紙5章1節)等の聖句によって明白にされていることに基づいて改革者たちは、良い行いによって救いを得るという考え方を全く否定した。

(2) 万民祭司

中世には、一般のキリスト者は、直接神に近づくことは許されず、司祭や聖人のような、教会によって権威を認められた人々の仲介を通さなければならないと教えられていた。宗教改革者たちは、この考えを否定した。それは「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司としてイエス・キリストを通して・・・王である祭司・・・とされた民です」(ペテロの手紙第一2章5節～9節) また、「私たちを王とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。」(黙示録1章6節)という聖句によって、宗教改革者たちは、あらゆる信者は神に近づく特権を与えられていることを確認した。だれでも神に直接祈ることができ、神から直接答えをいただくことができる。新約聖書のことばによるなら、すべての信者は、祭司とされた。

(3) 聖書の権威は十分なものであること

宗教改革者たちは、「教会の総ての権威は、聖職者に帰され、その最高の権威は、ローマ教皇の上に置かれている」というローマ・カトリック教会の考えを全く否定して、教会における全ての権威の基礎は、聖書であると断言した。

(4) 全てのキリスト者に対する「神の召し」

宗教改革者たちは、「召されたあなた方は、その召しにふさわしく歩みなさい」(エペソ人への手紙4章1節)「あなたがは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい」(コリント人への手紙第一、10章31節)の聖句に基づいて、全てのキリスト者は、毎日の日常生活の中で、従事しているどのような尊ぶべき仕事を通して、キリストを証しする者として神に召されていることを明確にした。



2節 矢島宇吉師、米国にて「神の教会運動」を学び帰国

神の教会運動が日本に伝えられたのは、1908年（明治41年）矢島宇吉師が米国から帰国して以後のことである。

矢島宇吉師は、1869年（明治2年）12月25日、群馬県群馬郡上郊村字保渡田で、矢島嘉市・花子の長男として生まれた。「練馬神の教会50年史掲載の矢島敬二（矢島宇吉師の次男）執筆『矢島宇吉の半生伝』」によると、当時の尋常高等小学校を卒業後代用教員を勤めていた頃、その学校長がある年、京都の同志社で教育された後は、従来の酒飲みでふしだらな性格が一変してきたのを見、兼ねてより日本にはキリスト教（耶蘇教）などという外国宗教は不用であるとの自分の意見にも拘わらず、キリスト教の研究に志すこととなり、群馬県高崎市の教会に出席し、ついにその教会の星野光多牧師より受洗するに至った。

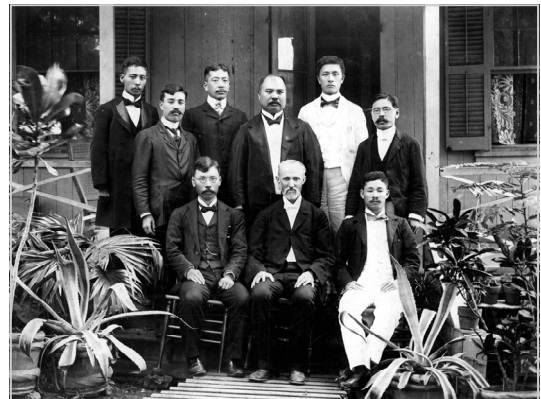


1904年7月2日
ハワイのヒロ市にて

その後、1895年（明治28年）東京に出て明治学院神学部に入り、東京郊外の中央線武蔵境駅付近に住んでいて、中央線敷設に功労のあったクリスチャン実業家、南氏宅に書生として下宿し東京に通学した。1897年明治学院を卒業した矢島宇吉師は、若林フジと結婚し、長男矢島諦一が生まれてから、ハワイのヒロ市の日本人教会に招かれ、牧師として一家三人で赴任した。

1907年（明治40年）、日本人教会を辞し、単身米国本土に渡った。ある夜、カリフォルニア州のオークランドからサンフランシスコ行の最終列車に乗った師は、途中一人の婦人が読み捨てていった一冊子を取り上げて読んでいたが、その中の文字が強く彼の心に響いた。その冊子こそ神の教会の機関紙ゴスペル・トランペットであり、このことにより彼が始めて交わりを結んだ牧師こそ後に米国神の教会から初めて日本に使わされた宣教師の一人、J・D・ハッチ師であった。

1908年1月には、インディアナ州のアンダーソンにあるジョン・クロース（Crose）師宅を訪れ、そこでハッチ師、その他の兄弟に会う。また、当時のゴスペル・トランペット社に滞在、ニューヨークの神の教会ミッション・ホームにも滞在した。そして、神の教会の真理に導かれ、「教会とは何か」を示され、真の悔い改めと救いを経験し、深い使命を感じ、帰国を決意した。1908年3月10日、サンフランシスコを出航、帰国の途についた。途中、ハワイ州ホノルルに寄り旧知の方々と再会し、聖書の教義を語っている。3月27日、横浜に上陸、家族、親戚の出迎えを受けた。



1902年8月5日ハワイ州・ホノルルの本川源三郎宅にて開かれた明治学院同窓会、中列左端が矢島宇吉師、前列中央がアレキサンダー博士